

# 妙心寺



狩野探幽筆「雲龍図」(江戸時代・重文)

京都の洛西、風光明媚な花園に約十萬坪という広大な敷地を持つ妙心寺。その昔、花園法皇がこの地を愛し、離宮を営まれ、また禅寺となつてからは境内にたくさん松が植えられたので、今では京都の人々から「松の御寺」として親しまれています。

南北朝時代、花園法皇の離宮を  
禅寺に改めたのが縁起

京都の洛西にある妙心寺は、北に衣笠山、西には兼好法師ゆかりの双ヶ丘を臨む景勝地にあります。臨濟宗妙心寺派の大本山であり、派内寺院が全国に三〇〇〇カ寺、塔頭寺院を四十六カ寺院持つ、日本最大の禅寺です。

その開創は建武四年(二三三七)。禅宗に深く帰依していた花園法皇が、離宮であつた花園御所を禅寺に改めることを発願し、ここに開山慧玄禅師(無相大師)を迎えたのが縁起です。敷地内には、国の重要文化財(重文)に指定されている建物が十棟以上あります。玉鳳禅宮とも呼ばれている玉鳳院(非公開)は、江戸時代に改築されました。隣接している開山堂(非公開)は室町時代の建立で、妙心寺内で最も古い建物です。

「玉鳳院の奥に花園法皇様が、開山堂に開祖の無相大師が祀られています。塔



花園太上法皇(はなぞのだじょうほうおう)。(非公開)



花園法皇にお供えする食事運ぶ用具、法皇献鉢通箱(ほうおうけんぱちかよいばこ)。(非公開)

頭寺院の住職が一月月の交替でお務めをして、院内の掃除、早朝四時には開山様の尊像の洗顔を般若心経一巻を唱えながら行なつたのちに粥座(朝食)、十時には齋座(昼食)、三時頃に茶菓子をお出ししています」

今回、妙心寺を案内していただいた、塔頭寺院・福壽院のご住職、荻須智善さんが話してくださいました。座敷から少し離れた庫裡から、一汁一菜を入れたお二人それぞれの通い箱を運ぶのは、かなり大変なようです。さらに心してお務めしなければいけないのが、開山堂内にある灯明とお香の煙です。六五〇年間絶ゆることなく灯されてきた火を消す訳にはいかないのだ、担当になった塔頭のご住職は、細心を払ってお務めしているそうです。「担当になった一カ月間は自分のお寺を閉じてお務めをした方もいたと聞いています」

南総門から北に真直ぐ伸びる  
松並木は妙心寺ならではの景観

妙心寺の敷地は、約十萬坪におよび、東西が五〇メートル、南北が六一九メートルと、南北がやや長くなっています。南総門を一步入ると真直ぐな石畳が大方便(重文)へと続き、その距離は二〇メートル以上。別名「松の御寺」とも呼ばれているように、両脇には松並木が広がります。

「臨濟録に栽松の教えというものがあ、そういう理由で花の咲く木を植えず松を植えたのでしょう。勅使門から三門・仏殿・法堂(いずれも重文)が一直線に建っているのは、おそらく妙心寺だけだと思います。妙心寺独特の風景だと思えます。全国でも珍しい



勅使門(重文)。内部より撮影。



朱塗りの三門(重文)。

法堂で行われる大行事の一つ  
新亡供養

妙心寺では年間を通じて大きな行事が幾つか行われていますが、その中の一つが新亡供養です。毎年六月下旬の五日間、法堂で行われます。全国各地の壇信徒が地域ごとに集まり、前年の四月から当年の三月までの一年以内に亡くなった親族の供養をします。

中央の須弥壇を囲むように壇信徒が座り、僧侶が奏でる尺八の音色で心を鎮めた後、厳かな雰囲気の中、管長を始め多くの僧侶が参列して法要が執り行われます。平成二十九年六月二十八日に執り行われた新亡供養の様子を特別に取材・撮影させていただきました。



法堂内で執り行われた新亡供養。



法堂(重文)。



大方便(重文)。襖絵は、狩野探幽と狩野益信の筆になる。

配置です」

妙心寺境内で唯一、朱に塗られている三門は、毎年六月一日の山門開法会の法要中、一時間ほど一般に公開され、楼の上に昇ることが出来ます。楼には十六体の羅漢が祀られており、荘厳なお姿を拝むことが出来ます。南総門の西側にある勅使門は慶長十五年(一六一〇)に建立されました。かつては総門でしたが、現在は四年に一度、管長が替わる際に行われる晋山式にのみ扉が開けられます。新任の管長は、勅使門から真直ぐ歩いて放生池、三門を通じて仏殿に入ります。「内々の儀式なので、一般に公開されることはありませんが、運よく来られた方は見ることが出来ると思えます」

法堂には狩野探幽が描いた  
直径十二メートルの巨大雲龍図

仏殿の北側にある法堂は、妙心寺最大の建物で、明暦二年(一六五六)の建立。鏡天井には狩野探幽が五十五歳の時に、あしかけ八年余りの歳月を費やしたと言われる「雲龍図」が描かれています。直径約十二メートルの巨大な絵は、見る角度によって龍の表情が微妙に変わる上、何処から見ても龍に睨まれている気がするところから「八方睨みの龍」とも言われています。

国宝の梵鐘は、文武二年(六九八)の鑄造と国内では現存する最古の梵鐘で、吉田兼好の『徒然草』にも記されている名鐘です。昭和四十八年(一九七三)までは妙心寺境内の鐘楼に吊るされていましたが、現在は保存のため法堂内に安置され、現在はCDで美しい音色が聴けるようになっています。



梵鐘(国宝)。正式には「黄鐘調の鐘」(おうじきしょうのかね)。

三門の東側に建つ「浴室」(重文)、別名「明智風呂」は、信長を討った明智光秀の叔父・密宗和尚が、明智光秀の菩提を弔うため天正十五年(一五八七)に創建。そのうち、明暦二

花園法皇の離宮だった面影を残しつつ、開放的な一面もある妙心寺。拝観客だけでなく、自転車に乗って行き交う土地の人々に出会うと、「松の御寺」として親しまれているのを改めて感じました。



広大な妙心寺の敷地は、静かな行まいながら、地域の人々が行き交う生活道路となっている。



ご案内いただいた妙心寺塔頭・福壽院住職萩須智善さん。



別名「松の御寺」とも呼ばれている。



新亡供養の様子。

年(一六五六)に改築されて現在に至っています。浴室内は中央に浴槽と洗います。風呂は蒸風呂形式で、寶子板敷きの隙間から蒸気が出るようになっています。「お風呂の北側に鐘がありますが、その鐘を鳴らして、お風呂に入る順番を知らせていたそうです」



浴室(重文)。別名・明智風呂。



妙心寺南総門(重文)

臨濟宗妙心寺派大本山妙心寺

住所 〒616-8035京都市右京区花園妙心寺町64  
電話 075-461-5226(法務部・拝観問い合わせ)  
交通 京福電鉄北野線「妙心寺駅」下車(北門)  
JR嵯峨野線(山陰本線)「花園駅」下車(南門)  
参拝 9:10~11:50 20分間隔にてご案内  
12:30 1回のみ  
13:00~15:40※11月~2月  
13:00~16:40※3月~10月 20分間隔にてご案内

